
東方 馬鹿正直な少年のお話

らららら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方 馬鹿正直な少年のお話

【Nコード】

N9937Y

【作者名】

らららら

【あらすじ】

幻想入りした馬鹿正直な少年が最強になる為に突っ走るお話。オリ主・最強・ハーレム成分が入っています。苦手な方はバックしてくださいな。

一話

——このお話はとある少年のお話だ。

全てを努力一つで物にしようとする、馬鹿正直な少年のお話だ。

何もかもに意味を見出そうと努力をする、馬鹿正直な少年のお話だ。

幻想郷で最強を目指そうとする、馬鹿正直な少年のお話だ。

正義感たっぷりで自分など省みない、馬鹿正直な少年のお話だ。

時に嘘を吐いて相手を労わる、馬鹿正直な少年のお話だ。

霊力魔力神力など持たない、馬鹿正直な外来人のお話だ。

そしていつか最強に成り上がるであろう、そんな努力の人のお話だ。

——そんな馬鹿正直な少年が、奔走するお話。

さて、物語は一体どのように変化するのか。

さて、物語はどのようにして終了を告げるのか。

そして物語は、どのようにして始まるのか。

——人型の妖怪が打ち出した直線の軌道を描く拳を左手の平で内側から弾く。同時に体を反転させて妖怪に背を向けながら接近し、鳩尾に右肘を叩き込む。

妖怪のうねり声と共に、ぐらりと妖怪が後退したのが分かった。瞬間——膝を曲げて体を折る。頭上を鋭い音と共に妖怪の手が奔った。後退しながらも拳を繰り出すとは——。

けれど、避けられたらその拳は隙を生むだけだ。

縮こまった体をバネのようにしてジャンプし、空中で体を反転させる。

「——ッああッ！」

ぐつと右拳に力を込め、腰を捻り——拳を顔面に咆哮と共に打ちつけた。空気を螺旋状に巻き込んだ右拳は腰の捻りも合わさって最強の一撃となり——唸りを上げながら妖怪を吹き飛ばす。

巨体の両足が浮き、そのまま地面と水平に吹き飛んでいった。

「……ふう」

着地すると同時息を一つ。やはり慣れていないらしく、腰が痛んでいた。左手で腰を摩りつつ、空を仰ぐとすっかり夕色に染まっていた。あの程度の下級妖怪ならば既に余裕で倒せる程度にはなった。上級妖怪ならああはいかないだろう。仕事が楽で良かった。

「……三ヶ月、か」

幻想郷と呼ばれるこの世界に入ってから、三ヶ月。ふと思い返せ

ば人里に送られた事自体、運が良かったのだろう。外人人は僕以外にも居るらしいが、しかし大抵が今のような妖怪に食われて人生を終了させるらしい。

——三ヶ月生きれたのは、奇跡なんだろう。

「まあ、頑張ればいけるだろう」

相変わらずの楽観的思考だとは思うが、他に考えようがないのでこれ以外に思う事などない。後はひたすらに頑張ってひたすらに強くなればいいだけだ。いつかは幻想郷中を見て回れるようにはなりたいものである。

ふと、そこで日が落ちそうなのに気がつく。慧音先生に頭突きされるのは勘弁だ。今から人里まで全力で走って十分か。畜生。舌打ちしそうになるのを抑えて、人里の方に向けて走り始める。もし頭突きされそうになったら妹紅に唆されましたでも嘘を吐こうか。

その後走り始めてから比較的速く人里に着く事が出来た。十五年生きてきたが、多分妖怪に逃げていた時期と同じような全力疾走だったはずだ。呼吸が追いつかず、深呼吸のようになってくる。

家に向かう途中で何度か「大丈夫か」と問われたが手を返してアピール。数分して家に着き、扉を開ける。

「よっ」

妹紅が居た。絹のように白い長髪にリボン、そして火のような赤色の瞳。口さえ悪くなければ僕は完全に一目惚れしていただろう。しかも可愛いし。不老不死だけど。

「……つか何で居るんだよ」

「暇だから来た」

という事みたいだった。とはいえ、一応家事などは出来るらしいし、何度か手伝っては貰ったので文句は言えない。ていうか居ても別に邪魔にはならないので気にはしないんだけど。

汚れた赤と白を基調としたパーカーを脱ぎ捨て、洗面所に持っていく。ふと気がついて下を見ると随分ズボンが削れていた。アリスさんに頼んで裁縫してもらうか。

「妹紅、アリスさん次はいつ人里に来るのか分かる？」

「んー、知らない。私基本的にそういうの調べないから」

「知ってる」

台所から響く声。つか妹紅に何かを期待してしまうのがおかしいのかもしれない。などと失礼極まりない事を考えながら、ズボンを脱いで籠に入れる。シャツを脱ごうとして着替えを忘れていた事を思い出した。

「妹紅ー、パンツとシャツ持ってきてー」

「……普通は女に頼むもんじゃないと思うけどな」

まあ確かに。けど別に気にしていないから良いだろう。基本的に外の世界でもこんな感じだった。そういえば太一とかは今何をしているんだろう。懐かしい。

と、外の世界の事を考えていると扉が開いて同時にパンツとシャツが投げられる。片手で素早くキャッチして「ありがと」と言ってから、風呂場に入る。

「あ……火忘れてた。妹紅ー！」

「はいはいはい！　　ったく私はメイドかよ」

「この際メイドになっちゃえばいいと思う」

「死んでもイヤだ」

軽口を叩きあいながら、妹紅は手から炎を出してお湯を沸かし始める。まったく便利なものである。今の内にシャツとパンツを脱いでおこうかと思っただが、さすがにそこは羞恥心が働いた。

と、その後ぼうつと妹紅がお湯を沸かしているのを見ていた。

「はい、出来たよ」

「ありがと」

「はいはい」

そう言って手を振りながら妹紅は風呂場から出て行く。そういえば何で来たんだろう。聞くのを忘れていた。別にどうでもいいか。

遅れて風呂場から出て、シャツとパンツを脱ぐ。結構久しぶりにゆったり出来る気がするなと考えながら――その後三十分程風呂に浸かっていた。

タオルのような布で体を拭きながら、ふと魔理沙の事を思い出す。アイツは今何をやってるんだろう。まあ、霊夢とかとつるんで居るんだろうけど、やはり人里には来れないのか。

まあ、家庭の事情というものだろうか。中々自由そうに見えて難

しい世界だ。

髪の毛の水分を最低限絞ってからパジャマを着て、台所に向かうと既に夜食の準備が出来ていた。三十分で夜食の準備を終えるとは……中々に妹紅はやり手である。水を取り出し水分を補給してから居間に向かうと妹紅が火で遊んでいた。

何をやっているんだコイツは。

「……僕は人様の家で火遊びしている馬鹿を今日初めて見たよ。外の世界でも家で花火する奴は居たが、火遊びしている奴は見たことない」

「いやあ、暇だったから」

「それで家燃やされたら一生呪うから覚えておけよ」

「……何か最近、空宏が怖くなってきた。童顔なのに」

「うつせい」

「背低いのに」

「……いいよ、もう」

「ごめん嘘だつてば！ 冗談だ冗談！」

「冗談じゃなくて本当の事なんだけど……何か最近言われなかったから気にしなくなってたのに」

「え、あ、本当ごめん」

「いやいいんだ、妹紅はそう思ってたって事だろ」

「あ、そういう事じゃないんだって」

「嘔吐かないでいいんだよ。もう……」

「ご、ごめん本当に」

「とか僕が本当に落ち込んでたら中々面白いよね」

ぶっちゃけてみた。

「……てめえ」

若干涙目だった妹紅さんが手に火を浮かべてた。

ああ、明日の朝日を拝むことが僕には出来るだろうか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9937y/>

東方 馬鹿正直な少年のお話

2011年11月29日23時50分発行